

インタ



まず、十三作の日本映画のタイトルを製作年代順に監督名と共に並べる。『ひろしま(一九五三年)』関川秀雄。『野火(五九年)』市川崑。『血と砂(六五年)』岡本喜八。『男の顔は履歴書(六六年)』加藤泰。『赤い天使(同)』陸軍中野学校(同)増村保造。『日本のいちばん長い日(六七年)』『激動の昭和史 沖縄決戦(七一年)』岡本喜八。『軍旗はためく下に(七二年)』深作欣二。『この子を残して(八三年)』木下恵介。『東京裁判(同)』小林正樹。『海と毒薬(八六年)』熊井啓。『美しい夏キリシマ(二〇〇三年)』黒木和雄。『美しい夏キリシマ』は私のプロデュース作でもあ

映画は集団の記憶装置

仙頭 武則

る。個々の作品についての説明は省くが、「太平洋戦争と日本」を多角的かつ多面的に捉えることができるよう選んだ。主演の若尾文子さんがあり、完成した映画を見ることをためらってきたと語る『赤い天使』もあえて加えた。日本が『敗戦』し、まもなく七十六年を迎える。戦争を経験した世代は少なくなりつつあり、記憶の継承が叫ばれて久しい。

ウィルスによるパンデミック(世界的大流行)が広がり、各国は感染封じ込めと経済活動の両立に苦闘している。このウィルスは、人々の間の分断も浮き彫りにした。加えて日本では五輪が状況をより混乱させた。ソーシャルメディアではここに至る様子

『敗戦』の教訓 描き続けて



『美しい夏キリシマ』の一場面
©映画同人社 配給：パンドラ

を兵たんの支援なしに決行された一九四四年三月の「インパール作戦」にたとえる言説も多く見られた。

「始まってしまったので、もう止められない」「起こってほしくないことは起こらない」と思い込み、それ以上考えなくなる」という戦時下の軍令部、国民双方にあふれていた情緒的で楽観的な思考が、ウィルス対策や緊急事態宣言下の五輪を通じて今日まで続いてきたことが露呈した。当

時も今も意見が対立する社会や組織の緊張を解くには、それぞれの主張を支える根拠や決定へ至るプロセスが、十分に情報開示されることが肝要だが、情報開示どころか『隠蔽』『改ざん』まで許してしまっている。

『敗戦』を『終戦』と言い換えたまま、多くの命を犠牲にした『失敗』を忘却のなたへ葬り、私たちは弛緩してしまっている。

映画は「集団の記憶装置」だ。しかし、映画をはじめとするあらゆるメディアが今は記憶喪失装置と化してしまったかのように思えてならない。歴史から学ぶ意志を持ち、真摯なまなざしで向き合えば、きっと、映画が多くの将来の教訓を投げかけてくれると私は信じている。(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー) 次回掲載は九月九日